

「本講」から「第14講」まで、「動詞」の「活用・転換・転用」について学習します

第10講 「動詞」の「活用」「転換」に「転用」

ここからは、「動詞」の「活用」で『文。』が「転換」され、次の新たなる『文。』への「転用」という方策で、「品詞」が拡張されていく課程をつまびらかにいたします

- ① 『文。』を構成する「ことば（詞）」の種類としては、「名詞」「自動詞」「他動詞」「形容詞」と、「役外族」としての「副詞」と「名詞修飾の形容詞」の5種類しなく（「品詞」の理解ですね）、
- ② 「ことば（詞）」の単位・形態には、「語」「句」「節」の3種があり、
- ③ 成句詞（「形容句」「副句」をつくる）「成節詞（「名節」「副節」をつくる）」「構成来形容節語（「形容節」をつくる）」「役外来形容節詞（「形容節」をつくる）」は、別に「句」「節」という大きな「名形副」をつくる「手段詞」に過ぎない、ということを経験・理解してもらうことが、前講までの課題でした
これらで作られた新たなる大きな「名形副」が、次の新しい『文。』中で、「文役（構成要素・主目補）」や「役外族」となって活躍することも学習してきました
さらに、本書では、第24講の課題で未習ではありますが、
- ④ 「助動詞」も、『文。』に「推量的」変化を与える「手段」にすぎないということが理解認識できれば、『文。』の構造理解は、ほぼ終わったも同然です
最後の課題に、「長文読解」では厄介モノとなる⑤「等位接続詞」があります

「単語」だけでは「認識・意思・評価・思想」等が伝達できない複雑高度な場合の手段として、「成句詞」による「句」があり、「名節詞」「副節詞」「構成来形容節語」「役外来形容節語」による「節」があるのは、認識・理解できましたね
このような手段で、より高度な「名詞」「形容詞」「副詞」をつくっているんですね
特に、「節」は、『文。』全体に着目した「名詞化」「形容詞化」「副詞化」でしたよね
「名詞化」「形容詞化」「副詞化」を「名形副化」と略します

本講では、「動詞」に着目した、「名詞化」「形容詞化」「副詞化」を見ていきます
すなわち、「動詞の活用」による、『文。』の「名形副化」です
実質的にみると、『文。』の「事物化（名詞化）」「状態化（形容詞化）」「状況化（副詞化）」ですね（「物態況化」と略します）（ここまでは、「転換」段階です）

日本語では、小学国語・中学国語でも古文でも、「動詞」の「活用」ということをしつつく学習しますが、英文法学習においても、日本語と英語という、同じ人間の言語なのですから、この「動詞の活用」という考え方を利用しない手はありません

日本語では、「動詞」の「活用形」がいろいろな「単語」に接続されて、「未然形」は「受動態」になり、「終止形」「連体形」は様々な「名節」「副節」となり、また、「連用形」はそのまま「名詞化」されるなどします

例えば、「飲む」という「動詞」が、「飲まない」「飲まれる」（未然形）、「飲みながら」（連用形）「飲み」（連用形による名詞化）、「飲むけれども」（終止形）、「飲むこと」「飲むとき」「飲むので」（連体形）、「飲めば」（仮定形）というように、「動詞」が「活用」され、他の「品詞」に「転換」され、次の新しい『文。』の中に組み込まれて、構成要素としての「文役」や状態（名詞修飾）や場面状況をあらわす「役外族」として「転用」されていくのです（なぜか、「飲む会」ではなく「飲み会」なんですね）

「動詞」の「活用」「転換」「転用」という考え方は、英語の学習ではほとんどありませんが、この考え方を利用すると、《「動詞の活用」に着目した『文。』の「名形副化」》が簡単に整理できてしまいます

順次、みていきましょう

英語の「動詞」の「活用」には、

- ①「不定詞」（「t o d o」）
- ②「能動分詞」（「～ing・doing」）（「現在分詞」といわれている）
- ③「受動分詞」（「～ed」）（「過去分詞」といわれている）
- ④「完了分詞」（「～ed」）（「過去分詞」といわれている）

というような4種類の「活用」があります

「動詞」が「活用」されて、「名詞化（事物化）」「形容詞化（状態化）」「副詞化（状況化）」していく様子をしっかり見ていきましょう

「動詞」が「活用」した結果は、「名詞化」「形容詞化」「副詞化」の3種類しかなく、すなわち、『文。』の「構成要素」のうち、「自動詞」と「他動詞」を除いた、①「名詞」⇒「主目補」と②「形容詞」⇒「補」と「役外族」の「名詞修飾形容詞」に、③「役外族」の「副詞」しかないということをしっかり認識・理解してください

以上のように、「動詞」が、「名詞化」されて「主目補」として、「形容詞化」されて「補役」「名詞修飾形容詞」として、「副詞化」され「場面状況を設定するもの」として、次の『文。』へ「転用」されていくのです（「～化」が「転換」の段階です）

さらに、従来の説明では、「現在分詞」といいながら「現在」の意味はなく、「過去分詞」といいながら「過去」の意味はなく、しかも、「受動分詞」と「完了分詞」の概念的区分もなく、名称からは実質的に意味するところが不明でした

本書では、実体に即して、「動詞の活用」を「分類」し、「命名」していきたいと考えています

すなわち、「能動状態（事物・状況）」を意味する「～ing・doing」は「能動分詞」と命名し、

「受動状態（事物・状況）」を意味する「～ed」は「受動分詞」と命名し、

「完了状態（事物・状況）」を意味する「～ed」は「完了分詞」と命名します
それぞれ「～状態」というのは、「形容詞化」を中心に考えたほうがわかりやすいからです（「能動物態況」「受動態況」「完了態」等といったほうがいいかもしれません）

・・・本講の、ここから先は、はじめのうちは、飛ばすか流すかしてください

「第14講」まで終わったら戻って来て、以下の表群を検討吟味してください

「動詞の活用」の全体像・俯瞰

「活用」形	名詞化 事物化 「構成要素」 「主目補」になる	形容詞化 状態化 ①「名詞」修飾 ②「補役」になる	副詞化 状況化 「役外族状況族」 「場面状況」の設定
不定詞	「名詞的用法」	「形容詞的用法」	「副詞的用法」
能動分詞	「名詞的用法」 （動名詞といわれていました） （the+能動分詞=～しつつある人々）	「形容詞的用法」 「能動状態」 （進行形といわれていました）	「副詞的用法」 「能動状況」 （分詞構文といわれていました）
受動分詞	✕ 「being」という 「自動詞」の「名詞化」 をとともえれば可 「受動事物」 （the+受動分詞=～された人々）	「形容詞的用法」 「受動状態」 （受動態） 主に「他動詞」	「副詞的用法」 「受動状況」 （分詞構文といわれていました）
完了分詞	✕ 「having」という 「自動詞」の「名詞化」 を伴えば可 「完了事物」	「形容詞的用法」 「完了状態」 ①「自動詞」による 「名詞修飾」 ②「have・has・had」 の「補役」	単独でも可能ではあるが、多くは「having」という「自動詞」の「副詞化」を伴う 「完了状況」 （分詞構文といわれていました）

「主な日本語訳」

「活用」形	名詞化 「構成要素」 「主目補」になる	形容詞化 ①「名詞」修飾 ②「補役」になる	副詞化 「役外族状況族」 「場面状況」の設定
不定詞	～すること	～するための ～すべき	～するために ～するほど
能動分詞	～すること	～している（状態）	「準副節」参照
受動分詞	×	～された（状態）	「準副節」参照
完了分詞	×	～してしまった（状態）	「準副節」参照

「分詞構文」と言われていた「分詞の副詞的用法」を本書では「準副節」とよび、「第14講」で学習します

不定詞のまとめ

不定詞	用 法	役 割
	名詞的用法	「主目補」になる
	形容詞的用法	①名詞修飾（役外装飾族） ②補役
	副詞的用法	場面状況の設定 （役外状況族）

能動分詞（現在分詞）のまとめ

能動分詞 （現在分詞）	用 法	役 割
	名詞的用法	「主目補」になる （動名詞） （the+能動分詞=～しつつある人々）
	形容詞的用法	①名詞修飾（役外装飾族） ②補役（進行形）
	副詞的用法	場面状況の設定 （役外状況族） （分詞構文）

受動分詞（過去分詞）のまとめ

受動分詞 (過去分詞)	用 法	役 割
	名詞的用法はありません	(the＋受動分詞＝～された人々)
	形容詞的用法	①名詞修飾（役外装飾族） ②補役（受動態）
	副詞的用法	場面状況の設定 （役外状況族） （分詞構文）

自 動 詞	完了分詞 （「受動分詞」は「群動詞」の場合のみ）
他 動 詞	受動分詞
	完了分詞

動詞の活用のまとめ

活 用		用 法	役 割
不定詞		名詞的用法	「主目補」になる
		形容詞的用法	①名詞修飾形容詞（役外装飾族） ②補役
		副詞的用法	場面状況の設定（役外状況族）
分詞	能動分詞 (現在分詞)	名詞的用法	「主目補」になる（動名詞）
		形容詞的用法	①名詞修飾形容詞（役外装飾族） ②補役（進行形）
		副詞的用法	場面状況の設定（役外状況族） （分詞構文）
	受動分詞 (過去分詞)	名詞的用法はありません	—
		形容詞的用法	①名詞修飾形容詞（役外装飾族） ②補役（受動態）
		副詞的用法	場面状況の設定（役外状況族） （分詞構文）
	完了分詞 (過去分詞)	形容詞的用法	「自動詞have」 の「補役」となる

多少、抽象的でわかりにくかったかもしれませんが、抽象概念で思考する能力も徐々に身に付けていきましょう

次講以降、「不定詞」、「能動分詞」、「受動分詞」、「完了分詞」を具体的に詳しく順次みていきます

「第14講」まで理解できたら、以上のまとめの各表を活用して、「動詞」の「活用・転換・転用」を咀嚼・嚥下・消化・吸収してください

大事な補足です

なぜ、「受動分詞」と「完了分詞」が同じ形態の活用形なのでしょう
(本来、「受完分詞」と名乗るべきなのでしょう)

日本語の「れる」「られる」が「可能・自発・尊敬・受け身」をあらわし(言語感覚的に親近感があるのでしょうか)、場面状況・前後関係から、意味を判別していくのと同じです

言語の感覚・英語の感覚として、「受動」と「完了」は近い位置関係にあるのです
「～ed」形(不規則変化も含む)を見たときは、「受動」と「完了」を並行意識することが肝要なのです

「殺される」というのは、「受動」と同時に「完了」の意味を含むのです

ところで、例えば、「可能」を表す場合として、「食べられる」というべきところ、「食べれる」と表現して、「ら抜きことば」として批判を受けています

しかし、言語は生きていると言われている通り、時の流れ・時代の変化に伴い変わっていくのです・・・しかも、より合理的に・・・

すなわち、「ら抜き」によって、「可能」の場合が、「自発・尊敬・受け身」から離脱し、「判別」が容易になってきているのです

① 「ワニ、たべられた」

② 「ワニ、たべれた」

① は、「ワニによって襲われ、食べられた」という「事故」として解釈されるでしょうし、

② は、「ワニ肉は初めてだけど、食べることができました」というように解釈されるのでないのでしょうか(「場面状況」が与えられなくても解釈・判別可能)

「ら抜き言葉」を勝ち誇って一面的に避難するのも、歴史や古文や言語・文法の進化を知らない視野の狭さを露呈しているのかもしれませんが

古文単語の「いみじ」、現代単語の「やばい」を比較検討してみてください

第 1 1 講 「不定詞」の本質、『文。』の「簡略的節化」

「不定詞」は、「h e l p」が「t o h e l p」になることだと思っていると、視野は狭く理解が浅薄になり、負けの始まりですよ（「本質」を見抜ける社会人になるべし！）

確かに、「動詞」の「原形」に「t o」をつければよいのですが、そんな局所的・表面的・形式的なことだけで満足してはいけません

「手段詞」によって、例えば、『文。』が「成節詞（「名節詞」と「副節詞」）」により、「名節」「副節」となり、**新たなる高度な活躍の場（転用の場）**を与えられたように、「動詞」を「不定詞」という「活用形」にすることで同様のことが可能になるのです

「節」の場合は、『文。』完全まるごとでしたが、「不定詞」の場合は、完全まるごとではなく、**軽やかに、簡略的に「名形副化」**させていきます（その性質上「（不定詞由来）準名節」「（不定詞由来）準形容節」「（不定詞由来）準副節」と呼ぶべきもので、それぞれ「不定（準）名節」「不定（準）形容節」「不定（準）副節」と略して呼称します）

ここで、《「『文。』の不定詞による「動詞」の活用・転換、転用形態」の場合、元の『文。』の「主語」はどうなるの》という疑問が発生すれば、なかなかのものです

「不定詞」の場合も、『文。』おおよそまるごと「名形副化」できるのです

おおよそというのは、『文。』そのままではなく、①「主語」すなわち「動作主」を《「成句詞」＋「人の目的格」》であらわし、②「動詞」を活用させるという、2つの作業で『おおよそまるごと「名形副化」』させることができるということです
①「主語・主体・動作主」の変形と②「動詞」以外には、いじることはありません
例文でみてみましょう

H e h e l p s o t h e r p e o p l e .

f o r h i m t o h e l p o t h e r p e o p l e

①「h e l p s」が「t o h e l p」になり、②「H e」が「f o r h i m」になるだけなのです（「o f h i m」の場合もあります→第7講「同格のo f」参照）
たった、これだけで、『文。』が軽やか簡略的に「名形副化」していくのです

元の『文。』の「主部」は、原則的には「動作の主体」として、《「成句詞」＋「人の目的格」》という形で「不定詞」の直前に置かれますが、新たな『文。』の主体と一致している場合や一般の人々が主体と考えられる場合は、省略されるのです

以下に、「名形副化」した例文をあげます

It is wonderful for him to help other people .
仮主語 形補 名詞的用法 真主語 [部]

I like for him to help other people .
他動詞 名詞的用法 名目的句 (目的準名節)

a way for him to help other people
中心名詞 形容詞的用法 名詞修飾の形容句 (準形容節)

She spend much money for him to help other people .
副詞的用法 (準副節) 目的 役外状況族

不定詞のまとめ

不定詞	用 法		役 割
	名詞的用法		「主目補」になる
	形容詞的用法		①名詞修飾 (役外装飾族) ②補役
	副詞的用法		場面状況の設定 (役外状況族)

ここで、「不定詞」は「名節」「形容節」「副節」の「簡略化」だということを認識してください

では、各用法について見ていきます

「名詞的用法」の特別な場合・・・「同格」

(「第07講、12講」参照)

the plan that we will go fishing

the plan (for us) to go fishing

「～という」で訳し、前にある「名語句」の具体的内容を説明する「同格」です

「形容詞的用法」の実体

「形容節詞」の場合と同様、「説明したい名語句（「先行詞」）」を元の『文。』から先頭に出し、残りの部分を「不定詞の形容詞的用法」として「先行詞」を「修飾」するのです（「不定詞」の部分は、「形容句（準名節）」ですね）（「構成要素（文役・主目補）」を「先行詞」にすると、「不定詞」内に「欠落」が生じます）

元の『文』

The man wrote a letter with a pen .

①「名主語句」

②「名目的語句」

③「副句の後属名語句」

①「名主語句」を「先行詞」とした場合 → 「主格」の「不定詞」

the man 欠落 to write a letter with a pen

②「名目的語句」を「先行詞」とした場合 → 「目的格」の「不定詞」

a letter (for the man) to write 欠落 with a pen

③「副句の後属名語句」を「先行詞」とした場合 → 「手段」の「役外来形容節詞類似」

a pen (for the man) to write a letter with 欠落

ここで、興味深いことに、「形容節詞」と「形容句」の「中間形態」あることに注目してください（辞書参照）

「不定詞」の「形容詞的用法」が「形容節」に近い表現感覚があるということですね

a p e n w i t h w h i c h t o w r i t e a l e t t e r

次に、「時」の「役外来形容節語（関係副詞）類似」のものをみてみましょう

元の『文。』

The man plays tennis at a time .

「a time」を「先行詞」にしてみますが、この場合は、「a t」が脱落します
習慣的に省略されるようになったのでしょうか（上述の「同格」との違いに注意してください）

a time (for the man) to play tennis (at)

「副詞的用法」の「意味・用法」

「不定詞」の「副詞的用法」の意味は、「～ために」だけではありません

種類	日本語訳	注意事項
目的	～のために	「目的」だど判別しやすくするためには、 「in order」「so as」を前につける
原因 理由 根拠	～して ～するなんて ～するとは ～するには	「形容語」の後ろにつけて、その「原因」「理由」「根拠」「具体的状況」等を付加する (第17講「あとひき形容詞」参照)
程度	～するには ～するほど	「too・・・ to do」 「so・・・ as to do」 「・・・ enough to do」 等の構文がある(「形副」の具体的程度を示す)
仮定	～すれば	「条件提示文」の「条件節」の「代用」
結果	・・・して(その結果)～	《多くは前から訳していくことを通例とする》

《「程度」をあらわす「不定詞」》

まずは、「so・・・ that ～」の復習です

This question was so difficult that he couldn't solve it .
副 副節 (「so」の具体性を高める)・程度

「この問題は、彼が解くことができなかったほど、そんなに難しかった。」(直訳)

「too・・・ to do」構文で書き換えてみます

This question was too difficult for him to solve .

「この問題は、彼が解くには、あまりに難しすぎた。」(直訳)

「that 節」は完全な『文。』でなければならないので「it」が必要ですが、
「不定詞」は「動作の表示」があればよく「it」は不要で省略されます
(「この問題はあまりに難しかったので彼は解くことができなかった」という訳は何なんでしょうか)

≪「結果」をあらわす「不定詞」≫ → 入試レベルではなぜか頻出なんですね

S h e g r e w u p t o b e a f a m o u s s i n g e r .

「彼女は成長して、有名な歌手になった。」と一般には訳されていますが・・・
（「彼女は有名な歌手になるほどに成長した」が適当な直訳ではないでしょうか）

「副詞的用法」の特別な場合

≪「独立不定詞」≫

一語の「副語」ではあらわせない状況を、「不定詞の副詞的用法」で「独立的」に言いあらわす慣用的な用法で、よく文頭に用いられます（もちろん、「挿入」も可能です）

「t o t e l l t h e t r u t h （実を言うと）」

「t o b e g i n w i t h （まず第一に）」

「t o b e s u r e （確かに）」

等が例としてあげられます

「群副詞」とでも呼べるものでしょう

最後に、いくつか、「不定詞」に関する技術的なことをあげておきます

「不定詞」の「否定」

元の『文。』が「否定文」の場合、「t o」の直前に「n o t」や「n e v e r」を置きます

H e d i d n ' t p l a y t e n n i s .

（f o r h i m） n o t t o p l a y t e n n i s

「代不定詞」

「主節」と同じ「動詞」を繰り返して言うのはわずらわしいので、後ろの「不定詞」の「動詞」は省略します（この状況を「代不定詞」といいますが、実質は「省略不定詞」です）

「to」は絶対に省略しないでください

You may have my lunch if you want to (eat it).

「wh to不定詞」 → 第08講参照

次の例文で示すように、「名節」なのか「不定詞の名詞的用法（準名節）」なのかの違いだけです（「主語」の明示の必要性の有無による）

You must decide whether you buy the book.

You must decide whether to buy the book.

「形容詞的用法」の補足

「補語用法」

下線部はそれぞれ、「主格補語」「目的格補語」と考えられます（第19・21講参照）

He seems to study math .

She asked him to help her friends .

どうでしょうか（「不定詞」という名称は、「名形副の同居」と善解しましょうか）
「不定詞」の実体がつかめたでしょうか
次講では、「能動分詞」の実体に迫ります

「不定詞」という呼称について

「不定詞」という呼称の由来はともかく、「不定詞」では、「動詞」が「活用」によって「名形副化」していくひとつの課程で、形態的にはおなじ「t o d o」のなかに「名形副」が同居していて、実際に使用される『文。』のなかで「名形副」の役割が決められるのです

（実際は、作文者が作文時に既に決めているのですが、読む側が確実に「作文者の真意」を読み取らなければならないのです・・・これが「解釈」ですね・・・「解釈」とは、「文字・文面」を通して、ひとつの事実や価値観や評価を確実に共有できる過程のことです）

形式的・外形的には「名形副」が定まるわけではないという実態からすると、「不定詞」と呼称することには大きな支障はないので、本書では、「不定詞」という呼称を維持します

ただ、「～ing」「～ed」という「動詞」の活用でも、おなじ形態でありながら『文。』のなかで「名形副」が決められていくということは同様なので、「不定詞」という名称を「動詞の活用体系」の上位概念として用いるならともかく、「t o d o」の個別称として用いることは残念です

「分詞」類似のような下位的な命名を検討すべきでしょうか

第12講 「能動分詞」と素直に言いましょうよ

「動詞」の「活用」のひとつに「～ing」がありまして、現象として、「動名詞」「現在分詞（進行形）」「分詞構文」と従来いわれております

この「動名詞」「進行形」「分詞構文」の3種の関係について、たまたま同じ形をしていると勘違いしている方や、同じ形であることについて、考えもしなかったり、目をつぶっていたり、目を逸らして逃げている方がほとんどだと思われます

「たまたま同じ形」だというなら、「不定詞」も「名形副」の各用法が「たまたま同じ形」だといきましょうよ（いってくださいよ）（100年以上、そう教えてきたんですよ）

無思慮なり、目をつぶり、逸らしている方々には、「現象」を「観察」し、「抽象化」「論理公式化」し、「上位概念」で結ぼうという「論理的思考」「科学的思考」「帰納的思考」「体系的思考」に薄い乏しいということになってますよといわざるを得ません

世界・日本を背負う未来のあるみなさんは、これからは、このような「論理的思考」「科学的思考」「帰納的思考」「体系的思考」ができるように努力し習慣化しましょう

さて、実体ですが、≪「動詞」には、「～ing」という「活用」があり、『文。』全体を「名形副化」させ、それぞれ「能動事物」「能動状態」「能動状況」を示し、次の新たな高度な大きな『文。』の中で活躍させていく≫ということなのです

そうすると、「不定詞」と全くといっていいほど同じ作用をしているのです

ただ、慣用的な違いや、意味や用法に微妙な違い（例えば、「～ing」が「経験的・過去の」で「to do」が「未来的」といわれています）があるだけで、基本的な「文法論理」や「利用法」にはほとんど違いがありません

主に、「他動詞」の「目的名詞」での採否と、両方で意味が異なる場合が重要です

また、『文。』まるごとの「節」化とは違いますが、「軽量的」ながら、「節」に近い面もあるので、「（能動分詞由来）準名節」「（能動分詞由来）準形容節」「（能動分詞由来）準副節」と呼ぶべきものでしょう（「不定詞」と区別する必要から、「活用能動準名節」「活用能動準形容節」「活用能動準副節」と称すべきものです）

「準副節」というものは、従来「分詞構文」として説明されてきましたが、「分詞構文」という名称では、「副詞」的かつ「準節」的な実体が明らかになりませんね

そもそも、「現在分詞」という、「現在」の意味すらない、実体とは乖離した名称までいただいていた、理解を困難にしています（そんな名称が100年以上存続しているとは・・・）

「動詞」の「～ing」という「活用」は、「能動的」な「名形副化」に過ぎませんので、本書では、「能動分詞」と呼びます（「分詞」という命名は納得できますね）

「不定詞」と同じだとすれば、ほとんど説明のしようもありませんが、「屋上屋を架す」ようなことをさせていただきます（この時点で「主語」の扱いに関心が及んでいますか）
ただ、技術的な細かい点に注意するだけです

「名詞化」の場合

例文でみてみましょう

He helps other people .

→ his helping other people

My son helps other people .

→ my son's helping other people

「helping other people」と『文。』の形態をおおよそ保ったままでいながらの、『文。』全体の「名詞化」ですから、「主語・主体・動作主」は、「名詞化」された「全体物」に付加された「所有格」としてあらわれます

そして、『文。』全体が「名詞化」されたのですから、次の新たなる大きな『文。』の「主目補」や「成句詞」の「後属役」になっていけるのです

一般には「動名詞」と呼ばれていますが、「単語」に注目しただけの矮小的呼称です

「所有格」としてあらわれた「動作主」が、次の新たなる『文。』の「主体・主語」と一致していれば、次の「my」のように、表記する必要はなく、省略されます

I like (my) playing tennis .

一致していなければ、表記されます

I like their playing tennis .

ちなみに、この「their」は、「like」の「目的役」であることをうけてか、「them」も用いられます（「成句詞」の「後属役」の場合も同様です）

「活用準名節同格」、「同格のo f」

第07講で学習した「名節同格」を、簡略化した「活用名節」の利用による軽量の「転換形」であり、「同格のo f」ともいわれています

この「同格のo f」の後ろに「所有格＋能動分詞による活用名節」を置きます（「能動活用名節同格」というべきでしょうか）

「先行する名語句」＋「o f」＋「所有格＋能動分詞による活用名節」（～という・・・）

They know the news that he killed her .
他動詞 名目的語 = 同格名節

「名語句」＋「同格節」全体で「目的部」
「～という知らせ」

では、「that 同格名節」を「能動分詞」の利用により簡略化します

They know the news of his killing her .
他動詞 名目的語 = 能動分詞準名節同格

「名語句」＋「o f」＋「同格句」全体で「目的部」
「～という知らせ」

いずれも、「The news is that he killed her .」というような「元の『文。』」があり、「that名節」を「補役」とする『文。』が由来である『『文。』の名詞化」です（それが、さらなる大きな次の『文』の「know」の「目的役」となっているのです）（「第07講」の「名節同格」参照）

なお、「不定詞」による「同格」（「第11講」参照）にも留意してください

これまでで、おおよそ『『文。』の名詞化』が出そろいましたので以下にまとめておきます（これはかなり重要な考え方をまとめたものなので、認識のうえに再認識です）

『文。』の「名詞化」

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| ① 「名節」（「第07講」参照） | ⇒ 『文。』 まるごと |
| ② 「不定詞」（「第11講」参照） | ⇒ 「動詞」の活用・転換、『文。』の軽量的転用（準節） |
| ③ 「能動分詞」→「本講」 | ⇒ 「動詞」の活用・転換、『文。』の軽量的転用（活用節） |
| ④ 「名詞構文」（「第06講」参照） | ⇒ 「品詞」の転換による、『文。』の変換 |

「形容詞化」の場合

「形容詞化」の場合は、常に、①「名詞修飾」の場合と、②「形容補役」の場合に分けて考えるのが原則ですね

そして、「形容詞化」の場合、「動作主」をあらわすことはなく、①「名詞修飾」の場合、「能動分詞」1語であれば「名詞」の前に置き、2語以上で副詞を伴っていれば、「名詞」の後ろにおきます（「能分名修」と略します）

a man helping other people

「形容詞化」の場合は、「関係代名詞」の「主格」と同様に、『文。』の「主体名語句」を説明する役割を担うのですから、「主体」を別に表記できるはずありません

②「形容補役」の場合は、「自動詞」の次に「補役」としておかれて、「主役・主体」の「状態」をあらわしますね（「能分形補」と略します）（主体は常に一致します）

He is helping other people .

ここで、お気づきでしょう

これは、「進行形」といわれているやつですよ

でも、文法的な概念としては、≪「自動詞」＋「形容補役」≫なんですね

本書では、英語長『文。』を読めるようにするということを主眼にしています
長『文。』を読むには、「純論理的文法的処理」を前提とした「論理的な一文の解釈」を経た、『文。』と『文。』のつながりや「段落」の要旨や「文章」全体の主張を読み取る「論理的文脈解釈」しか必要ありません（「作文者」の「真意」のつかみ取りです）
「読者・解答者」の「感情・感傷」をきいてはいません

「カルチャー講座」とは異なり、「入試」での「古文」「漢文」「詩」「短歌」「俳句」等でも同様で、これらの読解で要求されているのは、社会一般人の常識的感覚に基づいた「論理的解釈」であって、「解答者」の「感情・感想」を聞いてはいません

ましてや、「入試」の「現代文読解」や「英文読解」では、当然「論理的文脈解釈」しか要求されていません

どうあれ、単なる「感覚的」「情緒的」なものは、持ち込んではならないのです

「大学」や「社会」のような「公的場面」で要求されているのは、「論理に基づいた常識的思考過程」「常識論理的結論」と「その論理的理由」です

決して、「なんとなくそう感じた」であってはならないのです

とすれば、本論に戻りまして、「進行形」というのは、進行しているように思えるという「感覚的情緒的な感想（思い込み）」にすぎず、「論理的」「文法的」なものではないのです（そもそも進行とは、相当高度な哲学的概念で、西田先生に教えを乞うべき問題ではないでしょうか）

「形容詞」であらわされる「状態」というものは、ある程度の一定期間は継続しているものでして、それを「進行している」というのは、「文法論理」を離れた、「評価」や「感想（感覚的な受け取り）」「感覚」の問題なのではないでしょうか

「能動分詞」の「形容補役」を、通称として「進行形」と呼ぶのは勝手なのでしょうが、それは、「感覚的」「情緒的」「通俗的」なもので、ことの本質や原理をいいあてるものではなく、「非論理的」で、「論理的思考」が停止してしまい、先に進めないことを「覚悟」しなければならないでしょう（それが長年全国で蔓延しているとは驚異！）

現に、従来、≪「b e 助動詞」＋「現在分詞（本動詞）」≫というような「不可解」な「非論理」的な「思い込み」「眉唾公式」に陥っているのです

「動詞」が活用すれば、「品詞転換」が起こるのは言語の常識であり、ましてや「b e 助動詞」（辞書参照）なんて、常軌を逸しているのです

同じ「～ing」が、①「名詞修飾」のときは「形容詞」で、②「補役」のときは、「動詞」であるというような考え方が、「論理的」といえるのでしょうか
複雑な分類をして意味があるのでしょうか（「論理」とは、可能な限り「簡明」「簡便」でなければならないはずというか、自然と「簡素」となるのです）

すなわち、「能動分詞」により『文。』が「形容詞化」された場合も、『文。』の「動詞」に着目した「能動分詞」による「名形副化」の「一形態」にすぎませんし、また、例えば、「名詞化」で言えば、「h e l p」が「h e l p i n g」になったというような、「単語」だけに注目しても、上述の例文の「h i s」や「o t h e r p e o p l e」の「論理的説明」もつけられず、『動名詞』には、「主目補になれる名詞的側面」と「目的語や補語や副詞に従える動詞的側面」の二重の性質がある』というような「現象結果をひたすら追いかけて羅列する」という「微細的思考（ミクロ）」で満足し、≪『文。』全体として「名形副化」されている≫というような「巨視的（マクロ）」「全体的」「総合的」な「抽象化」「上位概念化」はできないのです

しつこく繰り返しますが、「大学」や「社会」のような「公的場面」で要求されているものは、「論理的な思考やモノ」「結論提示と論理的理由」「問題解決と思考過程」であって、「感覚的」「情緒的」なものは、「私裏的」な場面でしか通用しないのです

「感覚的」「情緒的」なものでは、「流される」「ほだされる」ことはあっても、「合理的」「説得的」「公的」ではないのです

「副詞化」の場合

「副詞化」の場合は、一般的には「分詞構文」と無（意）味乾燥に呼ばれています
「動作主」をあらわす必要があれば、「主格」であらわします

「主格」という点からすると、「副詞化」の場合は、「副節」に近いイメージがかなり強いのではないかと考えられます

本書では、「分詞の副詞的用法」「分詞準副節」として、第14講で学習します

能動分詞（現在分詞）のまとめ

能動分詞 (現在分詞)	用 法	役 割
	名詞的用法	「主目補」になる (動名詞)
	形容詞的用法	①名詞修飾 ②補役(進行形)
	副詞的用法	場面状況の設定 (役外状況族) (分詞構文)

「動詞の活用」に着目した『文。』の「名形副化」のまとめ

	名詞化	形容詞化	副詞化
不定詞	不定詞(準)名節	不定詞(準)形容節	不定詞(準)副節
能動分詞	活用(能動)(準)名節 (動名詞)	活用(能動)(準)形容節 (進行形)	活用(能動)(準)副節 (分詞構文)
受動分詞	—	活用(受動)(準)形容節	活用(受動)(準)副節 (分詞構文)

次講では、「受動態(受動分詞)」と「完了態(完了分詞)」の本質に迫ります

第13講 「受動分詞」と「完了分詞」

「動詞」の「活用」の「第3番目」として、「～e d」というものがありまして、また「不規則変化」というのがあることもご存知でしょう

一般的には、「過去分詞」と呼ばれています

しかし、「過去分詞」と呼ばれているのに、過去の意味はありません

「過去分詞」という用語は、「b e（助）動詞＋過去分詞＋b y～」というような、「受動態」をあらわすとかいう、「眉唾物的な公式」で知られていますね

ここでも、「受動態」＝「b e動詞＋過去分詞＋b y～」と固定化されているうえ、「b e動詞」は「助動詞」で「過去分詞」が「動詞」と「論理破綻」となっておりますが、そんな「現象」の追っかけ羅列や「論理思考停止！終了」でいいのでしょうか

《「動詞」に「～e d」という「活用」があり、「～される」という「受動状態」もあrawし、「形容詞化」と「副詞化」はされるが、「名詞化」はされない》というだけのことです（同じ形態ながら、「過去形」は「動詞」扱い、「受動分詞」「完了分詞」は「形容詞」と扱われます）

そして、「形容詞化」した場合は、①「名詞修飾」②「形容補役」で使われるというだけのことです

本書では、その本質的意味から、「受動分詞」と呼ばさせていただきます

「以上です」といいたいところですし、みなさんも、「もう結構」とお思いになっているかもしれませんが、ここでも「屋上屋を架」させていただきます

そもそも、「受動態」とは何なんでしょうか

あくまでも「動作」であり「消極的動作」とも呼ばれるべきものであるという哲学的な考え方もあるようですが、単なる「文法論理」を組み立てるにあたって、「宇宙観」「世界観」「人生観」を語る「哲学」的概念を持ち込む必要があるでしょうか

誰かが他人に殺されて遺体となって、「消極的動作」だと一般的に考えるでしょうか

「殺される」のは「消極的動作」だと考えて、「有用」なのでしょうか

「殺された」「状態」だと考えるのが常識的ではないでしょうか

「a killed man」は、「名詞修飾」の「形容詞」として認められているのですから、（「動詞」が活用されれば「品詞の転換」が起きるのです）だったら・・・

「He was killed.」が「動作」なんて思う人がいるのでしょうか
「～された」という「状態」をあらわす「形容補役」と考えるべきでしょう

そして、重要な展開的観点ですが、「動詞」のいち「活用形」たる「～e d」形は、「受動分詞」として「受動状態」をあらわし、「状态的」「結果的」になります
「状态的・結果的」意味は「完了的」意味合いをも当然伴い、「受動態」と「完了態」で同じ「～e d」形が使われるようになったと考えるべきではないでしょうか

「過去形」も「状态的感覚」が強く同じ活用形なのかもしれませんが、「動詞」の地位を保っています（要検討）

「受動態」と「完了態」が同じ「活用」であるといっても（例えば、日本語の「れる・られる」のようなものだと考えられます）、「過去分詞」というような実体を示さない名称よりは、それぞれ「受動分詞」「完了分詞」と呼ぶべきものと考えます

では、本論に入り、「受動態」とは、実体的に見れば、「主体・主役」と「目的役」との「立場・視点を変えた描写」です

ここで、「自動詞」と「他動詞」の違いを再考してみてください

「他動詞」には「目的役」があるので「受動態」になれますが、「自動詞」には「目的役」がありませんので、原則的には、「受動態」にはなりません（群他動詞）の場合は「受動態」になれます→本講にて後述）

「自動詞」の「～e d」形は「完了態」であり、
「他動詞」の「～e d」形は「受動態」か「完了態」なのです

「受動分詞」を「形容詞」としてあらたなる『文。』に「転用」する場合、「自動詞」＋「～e d」となり、「自動詞」は「b e 動詞」と「一般の自動詞」ですが、「完了態」の場合は特に「h a v e ・ h a s ・ h a d」という「自動詞」が使われます
この「形式的」な「自動詞」の使い分けによって、一応、「受動態」と「完了態」が区別されます（「h a s」が「助動詞」なんて言うなら、「c a n s」を提示してください）

ただ、≪「b e 動詞」＋「自動詞の完了分詞」（「b e g o n e」）≫という「過渡期的形態」があることは、「受動分詞」や「完了分詞」が「根源同一」の「形容詞」であることの歴史的・無意識的なあらわれではないでしょうか

単独の「自動詞」の「～e d」形を使う場合は、「完了分詞」しかありません（「目的役」がないので「受動態」はありません）

「a d e v e l o p e d c o u n t r y」（「発展してしまった国」→「先進国」）が好例です（a d v a n c e d、m a r r i e d、c l o s e d 参照）

ちなみに、「a d e v e l o p i n g c o u n t r y」は「発展しつつある国」→「発展途上国」です

★ここから先は読み流しにしましょう

受動分詞のまとめ

受動分詞	用 法	役 割
	名詞的用法はありませんが、 「the＋受動分詞」で 「～された人々」となる	「the accused」等が 「主目補」になる
	形容詞的用法	①名詞修飾 ②補役（いわゆる受動態）
	副詞的用法	場面状況の設定 （役外状況族） （分詞構文）

自動詞	完了分詞
他動詞	受動分詞
	完了分詞

・・・ 本講の、ここから先は、はじめのうちは、飛ばすか流すかしてください
「受動分詞」の「形容詞的用法」をみておきましょう

④「受動分詞」の「名詞修飾」の場合

『文。』から「形容詞化」されれば、「目的役」「補役」「副詞」等を伴う複数の語の
まとまりですから、「名詞」の後に置かれるのが原則です

ただし、「受動分詞」「完了分詞」1語の場合は、「名詞」の前に置かれます

①.「自動詞」の「受動分詞」の「名詞修飾」の場合

「完了的」なものしかありません

②.「他動詞」の「受動分詞」の「名詞修飾」の場合

「a broken window」（割られた窓）

「a window broken by the storm」（嵐で割られた窓）

「受動分詞」が「名詞を修飾」していますので、略して、「受分名修」です

③ 「受動分詞」の「形容補役」の場合

③. 「自動詞」の「受動分詞」の「形容補役」の場合

本来、「完了的」なものしかありませんが、
「群他動詞」という考え方の下に「受動態」が可能です

They laughed at him .
群他動詞

≪「自動詞」＋「前置詞」≫を「他動詞」とみなして「受動態」にするのです

He was laughed at by them .
自 群他動詞の受動分詞（「補役」）

④. 「他動詞」の「受動分詞」の「形容補役」の場合

The window was broken by him.
自 他動詞の受動分詞
形容補語 （略して、「受分形補」）

完了分詞のまとめ

完了分詞	用 法	役 割
	名詞的用法はありませんが、 「the＋完了分詞」で 「～してしまった人々」となる	「the learned」 「the deceased」等が 「主目補」になる
	形容詞的用法	①名詞修飾 ②「自動詞have」の 「補役」となる
	副詞的用法	場面状況の設定 （役外状況族） （完了的な分詞構文）

自動詞	完了分詞
他動詞	受動分詞
	完了分詞

「完了分詞」の「形容詞的用法」をみておきましょう

㉔ 「完了分詞」の「名詞修飾」の場合

⑤. 「自動詞」の「完了分詞」の「名詞修飾」の場合

「完了的」しかありません

「a escaped man」(逃げ出してしまった男)

「a country developed in 19th century」も可能です

「完了分詞」が「名詞を修飾」していますので、略して、「完分名修」です

⑥. 「他動詞」の「完了分詞」の「名詞修飾」の場合

「受動的」なものしか見当たりません（「受動的」な修飾に収束してしまうのでしょうか）

㉕ 「完了分詞」の「形容補役」の場合

⑦. 「自動詞」の「完了分詞」の「形容補役」の場合

He has arrived in Okinawa.

自

自動詞の完了分詞

形容補語

（略して、「完分形補」）

⑧. 「他動詞」の「完了分詞」の「形容補役」の場合

He has finished the work.

自

他動詞の完了分詞

形容補語

（略して、「完分形補」）

ちょっと面倒でしたかね

ここは、あんまり難しく考えないでください

★印からの「受動分詞」のまとめや「完了分詞」のまとめ以降は、飛ばしてあとからゆっくりやってください（本講のはじめの2ページだけしっかり理解してください）

次講は、「動詞」の「活用・転換・転用」の学習の最後になります

従来、「分詞構文」と呼ばれている、「能動分詞」と「受動分詞」の「副詞的用法」、すなわち「活用準副節」と呼ばれるべきものを見ていきましょう

補足 < the + 分詞 >

- ① 「the + 能動分詞 (～ing)」 ⇒ 「～しつつある人々 (物事)」
- ② 「the + 受動分詞 (～ed)」 ⇒ 「～された人々 (物事)」
- ③ 「the + 完了分詞 (～ed)」 ⇒ 「～してしまった人々 (物事)」

以上のような公式がありますが、「分詞」のあとに「people」「thing」等の省略と考えた場合、「people」「thing」の残滓を強く考えれば「形容詞」と考えられますが、「people」「thing」を無きものと考えれば「分詞」の「名詞化」と考えられます

- ① 「the dying」 ⇒ 死にかけている人 (々) → 瀕死の人 (々)
- ② 「the accused」 ⇒ 訴えられた人 (々) → 被告人
「the unexpected」 ⇒ 予期せぬ出来事
- ③ 「the deceased」 ⇒ 亡くなった人 (々) → 故人
「the learned」 ⇒ 学んだ人 (々) → 学者

補足 << 受動態の考察 >>

「受動態」文法的実体はどういうものでしょうか

それは、「受動分詞」を利用した『文。』の「受動転換的形容詞化」のなのです

「能動分詞」のような単なる「形容詞化」ではなく、「主目」転換を伴った「形容詞化」です（「副詞化」も同様ですが、以下省略して説明します）

そして、『文。』の「形容詞化」の一種なのですから、元の『文。』の「構成要素」や「副詞系」を従えているのです（これは、「『文。』の名詞化」や「『文。』の副詞化」と同様ですね）

ここでの注意は、元の『文。』の「目的語」を中心に据える転換ですから、元の『文。』の主体は表舞台からは降りて、後方支援にまわっているのです（「副詞」化）

その結果、元の主体を表したい場合は、「b y + 目的格」となり（「副句」ゆえに省略されやすい）、元「補語」・元「副詞」のようには必須的には残存することはないのです

第14講 『「分詞」の「副詞的用法」』⇒「準副節」

一般に「分詞構文」といわれているものがありますが、実体的には「分詞の副詞的用法」であり、「副節」を「簡略化」したものですので、本書では「活用準副節」と呼びます（「分詞構文」という名称では、あまりに形式的で、実体がつかめません）

（しよせん、「準副節」であり、難しいことは何もありません）

「副詞系」ですので、「副詞三原則」があてはまりますが、「意味」の範囲は少ないです（また、「挿入」と「文全体修飾」に注意ですね）

I「準副節」のつくり方、II「準副節」の意味、III「詳細注意事項」の順で見えます

I 「準副節」のつくり方

- ①「副節」の「副節詞（成節詞）」を取り去る（まれに残存する場合もある）
- ②「主節の主部」と「副節の主部」が一致していたら、「副節の主部」は取り去る（「副節」の「主部」が「固有名詞」の場合は「主節」に移動する）
- ③「副節」の「動詞」を「分詞」に変える
「能動態」の「動詞」は「能動分詞」に変える
「受動態」の場合、「受動分詞」はそのままにする（「自動詞」を「分詞」にする）
- ④「be動詞」は「being」にする → 「省略できることに注意」

When Taro went home, he saw a patrol car.

① ② ③ ②

- ① 「副節詞（成節詞）」を取る
- ② 「副節のTaro」と「主節のhe」が同一人物で一致しているので、固有名詞の「Taro」を「主節」に移動し、「副節」の「主語」は取る
- ③ 「went」を「going」に変える

Going home, Taro saw a patrol car.

「while」「if」「though」の場合は、「while doing」のように、意味を明瞭にするために、「副節詞」が残る場合が多いです

Ⅱ 「準副節」の意味

「副詞三原則」に掲げた、通常の「副詞」の意味よりは、かなり限られています

種 類	日本語訳	元の「副節詞」
時	～するとき、 ～したあとで ～するとすぐに	「when」「as」 「after」 「as soon as (「群副節詞」)」
理 由	～なので	「because」「as」
条 件	～すれば	「if」
譲 歩	～だけれども	「though」「although」「as」
付帯状況	～しながら(「同時」)	「while」「as」
	～して(「連続行為」)	「, and」(「等位接続詞」)

訳すにあたっては、「時」「理由」「付帯状況」がほとんどで、その他はまれなので、まずは、「時」「理由」「同時」「連続行為」の「訳」を当てはめてみてください
また、二通り以上の「訳」が当てはまる場合もあります

「準副節」は「副節詞」がないので、はっきりとした意味がとりにくいものです
実際は、「副節」と「主節」との関係を文脈から読み取る「解釈」の問題なのです
まずは、上記の意味を覚え、当てはめてみるのが有効でしょう

「文章全体」や「段落」での位置関係をしっかり見極めてください
難易度の高い「解釈」を要求される場合もあります(次の例文参照)

「彼女のことを好き①」、私は彼女と結婚します」
「彼女のことを好き②」、私は彼女と結婚しません」
「彼女のことを好き③」、私は彼女と結婚しません」

①は「なので」が普通ですね

②は「だけれども」が入るでしょうね

③に、「なので」が入り得るのがわかりますか

収入とか家の許しだとか様々な「外的要因」があるでしょうし、生活に疲れる様子を見たくない(美しい思い出にしたい)というような「内的要因」もあるかもしれません

このように、文脈・場面状況に応じた「解釈」をしなければならないのです

ここからは、基本構造の理解という本書の射程からすると細かすぎる知識なので、あとからじっくりやってください（最初は流し読みで結構です）

III 「準副節」の詳細注意事項

①「否定」

「n o t」「n e v e r」は「分詞」の直前に置きます

B e c a u s e I c o u l d n ' t r e m e m b e r h e r n a m e , I d i d n ' t s p e a k t o h e r .

N o t r e m e m b e r i n g h e r n a m e , I d i d n ' t s p e a k t o h e r .

②「時のズレ」

「主節」より時間が古い「準副節」には、「h a v i n g」で時間調整をします

B e c a u s e I s l e p t w e l l , I a m f i n e n o w .

H a v i n g s l e p t w e l l , I a m f i n e n o w .

「副節」が「過去完了」の場合は、「h a d」を「h a v i n g」にするだけです

③「受動態」と「b e i n g」「h a v i n g b e e n」の省略

「準副節」が「受動態」の場合、「b e i n g」「h a v i n g b e e n」は、通例省略されます

W h e n h e w a s s c o l d e d b y h e r , h e w a s s i l e n t .

(B e i n g) S c o l d e d b y h e r , h e w a s s i l e n t .

Because he had been praised by her, he was happy.

(Having been) Praised by her, he was happy.

④「同格」と類似の「文頭の名詞」

(Being) A gentleman, Taro never gets angry.

「タローは紳士なので、」と「理由」の「準副節」で訳します

⑤「文頭の形容語」

(Being) Cheerful, Hanako is loved by everyone.

「ハナコは快活なので、」と「理由」の「準副節」で訳します

⑥「主部の不一致」

「主節」と「副節」の「主部」が一致していない場合は、「準副節」の「主部」はそのまま残します（「独立分詞構文」といわれています）

Because her mother was ill, Hanako cared of her.

Her mother being ill, Hanako cared of her.

「形式的な主語」といわれている「there」（実際は「副語」）も残します

Because there was no seat, we kept standing.

There being no seat, we kept standing.

⑦「連続行為」

He came into my house, and took off his hat.

「連続行為」の場合、上の例文では、以下の二通りが可能です

Coming into my house, he took off his hat.
(私の家に入り、彼は帽子をとった。)

He came into my house, taking off his hat.
(彼は私の家に入って、帽子をとった。)

「挿入」すると、意味が異なります(「付帯状況」になります)

He, taking off his hat, came into my house.
(彼は、帽子をとりながら、私の家に入った。)

⑧「慣用的な準副節」

参考までに、主な「慣用的な準副節」をあげますが、細かい知識なので後回しで結構です(副節由来の慣用的な副句というべきでしょうか)

慣用的な準副節	意 味
generally speaking	一般的に言えば
frankly speaking	率直に言えば
strictly speaking	厳密に言えば
all things considered	あらゆることが考慮に入れられると
weather permitting	天気がよければ
speaking of ~	～と言えば(「群成節詞」と捉えるのも可能)
talking of ~	～と言えば(同上)
judging from ~	～から判断すると(同上)
take ~ into consideration	～を考慮に入れると(「第21講」参照)

慣用的な表現は、基本を確実に学んだ後に知りたいですね(無知なバカ暗記は徒労ですよ)

《上記表への補注》

「一般的な主語が省略されています」

「all things (being) considered」となります

「weather」は「準副節」の「主語」です

「take」は「拡張動詞」で「into consideration」は「形容補句」です
等を参考に、「文法的」に考えてみて、「元の副節」を復元してみてください

⑨「分詞の副詞的用法」の「副節詞化」

参考までに、主な「分詞の副節詞化（分詞の後ろに完全な『文。』＝「節」がくる）」をあげますが、細かい知識なので後回しで結構です

分詞の副節詞化	意 味
assuming (that) assume (that) (命令形によるもの)	～と仮定して、～とすれば (～を想定すると)
considering (that) (成句詞化もある・・・後ろに名語句がくる)	～を考慮すると ～のわりには
given (that) (成句詞化もある・・・後ろに名語句がくる)	～と仮定すると (～を与えられると) ～を考慮に入れると
granting (that) granted (that)	仮に～だとしても (～を認めると、～が認められると) (～を与えると、～が与えられると)
providing (that) provided (that)	もし～ならば、～という条件で (～を与えると、～が与えられると)
seeing (that)	～であるからには (～を認めると) ～であることからすると
supposing (that) suppose (that) (命令形によるもの)	もし～ならば (～を想定すると)

「命令形の動詞の副節詞化」もあげておきました

⑩「分詞の副詞的用法」の「成句詞化」

参考にまで、主な「分詞の成句詞化（分詞の後ろに「名語句」がくる）」をあげますが、細かい知識なので後回しで結構です

分詞の成句詞化	意 味
a c c o r d i n g t o ~	～によれば、～に従って
c o n c e r n i n g ~	～に関して言えば、～について
c o n s i d e r i n g ~ (副節詞化もある) (n o t w i t h s t a n d i n g 参照)	～を考えれば ～のわりには ～にもかかわらず
e x c e p t i n g ~	～を除いて
g i v e n ~ (副節詞化もある)	～を考慮に入れると (～をあたえられると)
i n c l u d i n g ~	～を含めて
r e g a r d i n g ~	～に関して

「Ⅲ」の「注意事項」は細かすぎましたね

（本書の「基礎理論・構造把握」という主眼からはすれ、「基礎知識編」とでもいうべき「別巻」の守備範囲ですね）

本講では、「分詞の副詞的用法」により「副節」が「簡略化」されているという実態を学習しているのだということを見失わないでください

本書の「文法の基本事項」・「『文。』の基本構造」を理解するという基本的なねらいからすると、「Ⅰ」と「Ⅱ」をしっかり理解することが重要です

そして、「副節」の意味（文脈）を決める「副節詞」がなくても、「主節」とのかねあいから意味がおおよそ決められるのがわかったでしょうか

また、「時」でも「理由」でも「付帯状況」でも、どれでもいい「場面状況」だと「作文者」が思っているので、「副節詞」なしの「準副節」を使っているとも言えます

では、次講では、「名詞系」「形容詞系」「副詞系」というように、全体像を大きくまとめて俯瞰してみます

「系」というのは、それぞれの「品詞」をさらに大きくまとめた言い方です

「第〇七講」の講末の再掲の補足です

「第〇七講・節」の段階ではかなり難しい内容でしたが、本講終了後（理解後）ならば、ある程度容易に理解できるかと思います

実は、「第〇七講」終了段階と「第１４講」終了現在の「理解度・認識度」の違いを認識・実感していただきたいのです

「転用副節詞」

- ①『「名語句」＋「同格のthat節」』全体を副詞として働かせたい場合、
「名語句＋that」が「副節詞」として作用します
多くの場合、「that」が省略されますので、実質的には「名語句」が「副節詞」として働いているので、「名語句の副節語への転用」といえます
「the instant (that) 節」参照
- ②「動詞」の活用形態である「能動分詞」と「受動分詞」で、その「動詞」が「他動詞」で「that節」に従えることができる場合、「分詞＋that」が「副節詞」の働きをする場合があります（本講の⑨の表を参照）
「that」は省略される場合がほとんどなので、「分詞」自体が「副節詞」の働きをしています
「動詞」の「活用形」たる「分詞」の「副節詞」への転用といえます
- ③「成句詞＋名語句＋同格that」全体が「副節詞」として働いている場合があります
「on condition that」参照

これらは、一語の「副節詞」として覚えてしまうのが得策ですが（「群副節詞」）、ただ、以上のような成立過程を認識理解していることが理解の経過として肝要かと思います